

■三木鶴郎

みきとりろう

第一次大戦始 1914=

作詞家、マルチタレント。放送CM創成期に、歌や番組を先導して一世を風靡、多くの著名タレントを育てた。

東京市麹町区飯田町で、三重県出身の繁田保吉の長男に生まれる。本名繁田裕司。

父保吉は立命館大学を出て岡山地裁の判事となつたが、私学出ゆえに差別を受け、官界を去つて弁護士となつたため、息子はどうしても東京帝大法科に入れようと望むが、母志満の実家は外堀飯田橋の大料亭[富士見様]で、母方の祖父半蔵は派手好みの趣味人で、その遺伝子を受け継いだらしく、生来虚弱で、冬季は母と熱海に逗留、旅館の若旦那がサイレント映画を上映し蓄音機で音楽を流してくれて刺激を受け、

大暴落・・・1920= 6歳：暁星学園の小学校に入学、

原教首相暗殺 1921= 7歳：

水平社結成・1922= 8歳：一家で蟻殻町に引っ越し、城東小学校に編入。その際、独立した子供部屋をつくつて貰つた上、子供向け豪華本、さらにはベビーオルガンまで買って貰つて、創作スタジオの原点になるが、

関東大震災・1923= 9歳：大震災に罹災。すべてを失つたが、父の判断で皇居前広場に避難したことから、生き延び、父の縁で富士見町の屋敷に仮住まい、暁星小学校に戻り、

円本時代始・1926=12歳：そのまま暁星中学校に進む。

校風が性格に合つていたことから、多くの友人を得、とくに、4人の裕福なレコードマニアの家に通つて、音楽への感受性を磨く。

海軍軍縮条約1930=16歳：4年で修了し、浦和高等学校に入学。父からの褒美の金で、何枚ものレコードを購入、5年に進んだり、他の学校に進学した音楽仲間とサークル[星友]をつくり、自ら主幹となって、機関誌も発行。寮祭を取り仕切るべく、入寮するも、成功裡に終わると、

満州事変・・・1931=17歳：自宅に戻る。

五一五事件・1932=18歳：九段のお堀端に引越す。近くの友人森本武也の家で、その家族と、小野アンナからヴァイオリンを学ぶ。

国際連盟脱退1933=19歳：卒業し、東京帝大を受験するも失敗し浪人。合格した森本に誘われ、東大の音楽部に入り、すぐに活躍、帝人疑獄事件1934=20歳：2度目の受験も風邪で失敗、徴兵逃れのため専修大学に籍だけ置く。制服時計店でドイツ製カメラ"コレ"を目にするとたまらず、父親を口説き落として購入し、各地に友人と撮影ハイク、

芥川直木賞始1935=21歳：ようやく、父の希望する東京帝国大学法医学部に入学。音楽部オーケストラの一員としてラジオ出演。

日中戦争始・1937=23歳：

在学中、高等文官試験の司法科と外交科の受験にそれぞれ失敗して、2年留年し、

大政翼賛会・1940=26歳：法律学科を卒業し、日産化成工業に入社し、富山工場に勤務するも、召集され、

日米開戦・1941=27歳：二等兵として、東京六本木にあつた陸軍東部第六部隊へ入隊。経理部幹部候補生試験に合格し、千葉県の東部軍管区教育隊の陸軍経理学校へ入学。同期の五島昇と出会い、

・・・・・・・1942=28歳：陸軍経理学校を卒業。習志野戦車東部第9部隊へ配属され、少尉に昇進。席を並べる五島昇と親交、

敗戦・・・1945=31歳：千葉県習志野に新設の東部軍管区教育隊に勤務し、主計中尉。下宿の末娘と結婚直後に敗戦となり、大尉として復員。九段の自宅の焼け跡に掘立て小屋建てて新婚生活、大事にしていたベビーオルガンで作曲をし始め、焼跡の歌「南の風が消えちやつた」をつくつて、母に自慢、放送局への持ち込みを提案され、

新憲法公布・1946=32歳：*創刊したばかりの[音楽ウイークリー]誌売り込みを名目に、NHKラジオに乗り込む。面会したの音楽部長吉田信に、楽譜を見せるや、すぐさま10分枠を与えらる。米軍キャンプ巡りをしていた経験から、FENのしゃれた番組に倣う[歌の新聞]を企画、三木鶴郎楽団を結成し、東京麹町にスタジオを建て、すべてを企画制作、のちの河井坊茶らトリオで出演、名物プロデューサー丸山鐵男(真男の兄)に褒められ、レギュラー番組になる。好きなミッキーマウスとトリオをかけて三木鶴郎とするが、アナウンサーが"とりろう"と誤読して、定着。GHQの民間情報教育局(CIE)による差配のもと、「八紘一字」の語を使って、[歌の新聞]は打切り、

新憲法施行・1947=33歳：「話の泉」「二十の扉」などと同様、アメリカの人気番組をもとに、放送開始となったラジオ番組[日曜娯楽版]の「冗談音楽」のコーナーとして復活。大当たりして、一躍唯一人のラジオスターになり、

極東裁判決・1948=34歳：文芸誌[八雲]で、内田百閒、井伏鱒二との鼎談「酒仙放談」が組まれたが、年の差もあって嗜み合はず。

三大事件・1949=35歳：レコードデビュー直前の美空ひばりと共に演。CIEの[日曜娯楽版]の担当官フランク馬場が関心を持ってくれて親交し始め、彼から、番組の視聴率は断然トップで、芸能人人気投票でも1位になったことを知る。

朝鮮戦争始・1950=36歳：この年、ソニーの井深大・盛田昭夫とも早くから付き合つて、国産初のテープレコーダーが発売されるや、すぐに購入するなど、CM界を先導。九段の土手脇にモダンなマイホームを新築。*特急"つばめ"はとの運転開始に、[日曜娯楽版]で「僕は特急の機関士で」を流すと、大ヒット、各線版が次々つくられ、

独立回復・1951=37歳：北海道巡りまで全国をカバー、歌詞が148番までになり、最大のヒット曲になる。民放ラジオ局第1号中日放送開局に合わせて、小西六写真提供の番組をプロデュース、冒頭の日本初のCMソングとなる「僕はアマチュア・カメラマン」が人気の灰田勝彦の歌で、「僕の彼女はダットサン」は自ら女性とデュエットで歌うなど、「僕は・・・」ものが次々ヒット。[日曜娯楽版]に誘つて出演した楠トシエは、一躍全国区歌手になり、以後、多くのCMソングでコンビを組んで、元祖コマソンの女王になってゆく。[日曜娯楽版]に投稿していた永六輔のコントを採用して、のちのテレビ界の巨人の登場の契機にもなった。

メテー事件・1952=38歳：CIEの任務を終えて帰米するフランク馬場をオーブン間もない[東京温泉]に招いて歓送。冗談音楽で吉田茂を諷刺する「フラフラ節」を続けて、圧力がかかり、[日曜娯楽版]は[ニーモア劇場]に衣替え、

自衛隊発足・1954=40歳：ディズニーのアニメで日本初の吹替え映画となる「ダンボ」の日本語版制作を指揮、ヒットし、以後「ピノキオ」まで4作に関わる。冗談音楽は一応続くも、人気も凋落し始め、造船疑獄への辛辣な諷刺で佐藤栄作を激怒させ、ついに打切り、国会に呼ばれたりする。文藝春秋社の提供の文化放送[みんなでやろう冗談音楽]で復活、人気アイドルトップの中村メイコの歌う「田舎のバス」が大ヒットするも、吉田内閣の退陣を機に終了宣言。ミツワ石鹼の「ワ・ワ・ワトワが三つ」を皮切りに、消費者直結する商品CMに本領を発揮、

55年体制始・1955=41歳：シオノギの「ボボンの歌」、

国連加盟・1956=42歳：野坂昭如が三木事務所に入ってまもなく、[冗談工房]を設立。最初の企業名入りCMソングは「ソニーの唄」。「わんわん物語」公開に平行するラジオ版では、ブル役に浅沼稲次郎を引張り出して、話題に。

なべ底不況・1957=43歳：酒場で知人に殴られ負傷、日赤病院に入院。*テレビCMソング第1号となる森永ミルクキャラメル「森永音頭」「森永小唄」を作詞後、「アーモンドグリコの唄」が大ヒットして、江崎グリコと様々な商品のCMソングを手掛けて行く。三共製薬の風邪薬のCMソングの歌詞の結び「クシャミ三回 ルル三錠」が広く定着。さらに、依頼が入るやその場で作詞した「ジンジン仁丹」も、売り出し中のダークダックスの声とともに大ヒット。

インスタントラーメン・1958=44歳：不二家の「ミルキー行進曲」「野球キャラメル」、

美智子妃・1959=45歳：すでに糖尿病であったが、それが原因でできものが悪化、日赤病院に入院。以後、真摯に闘病。

安保闘争・1960=46歳：より本格化すべく[三芸]を立ち上げてまもなく、任せた社長が、乗っ取り図る課長に殺害される事件。

イタイイ病始・1961=47歳：病院に迷惑をかけないよう「作曲バス」をつくつて話題に。CMソングの功績で、民放賞。

全国総合計画1962=48歳：田辺製薬の「アスパラ」販売とともにスタートしたCMソングは、前年デビューした弘田三枝子の歌もあって大ヒット。船橋ヘルスセンターのCMソング「長生きチョン・パ」もまた時代を画した。

TV宇宙中継始1963=49歳：小谷正一の企画で、初めて外国旅行。TVアニメ「鉄人28号」の主題歌を作詞・作曲、同番組の提供スポンサー江崎グリコを意味する「グリコ、グリコ、グーリ～コ～」の語などで、大ヒット。

東京オリンピック 1964=50歳：この年発売の青山ミチ版「僕は特急の機関士で」を最も気に入つていて。[三芸]を解散。

霞ヶ関ビル・1968=54歳：

全共闘・・・1969=55歳：*{糖尿病友の会}を発足、会報{糖友}発行。以後、仕事は制限、冬はグアムやサイパン、ハワイで過ごす。

石油ショック 1973=59歳：

JALハジ'ヤック・1977=63歳：

・・・・1981=67歳：「私の愛する糖尿病」を出版。

中曾根内閣・1982=68歳：

バブル始・1986=72歳：LP「三木鶴郎集大成」が発売される。

55年体制終・1993=79歳：日本廣告音楽制作連盟によって三木鶴郎音楽賞が創設された。

自社さ連立・1994=80歳：4部構成から成る回想録を書き上げ、このうち1部と2部が平凡社から刊行された直後に、没した。

泉麻人「冗談音楽の怪人・三木鶴郎」、